

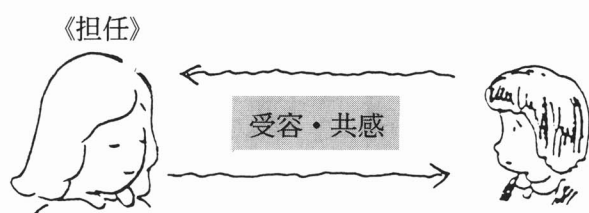
4 指導援助の経過

(1) S子への指導援助

担任が、無視による孤立で傷ついた心を十分受け止め支えた。S子の心の痛手は深いものであったが、相談を繰り返すうち、表情の固さが徐々にとれてきた。

〈S子〉

「一人ぼっちは嫌だ」
「毎日、休もうと思った」
「また友達と話せるかな」



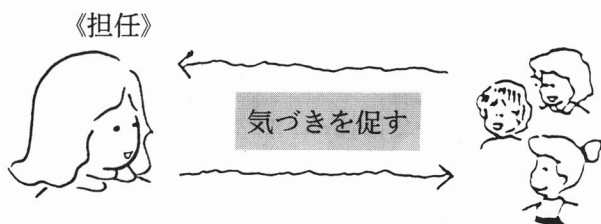
「そう、一人は辛いよね」
「よくがまんしたね」
「先生はあなたを応援するわ」

(2) A子たちへの指導援助

A子たちにS子をいじめている自覚はなかった。担任は、A子たちの不満や不安にも耳を傾けながら、S子の気持ちについて考えさせた。A子たちも、S子を心理的に追いつめていた自分たちの行動を振り返り始めた。

〈A子たち〉

「S子はぐずだから嫌い」
「親が勉強しろと騒ぐの」
「S子も辛いのかな」



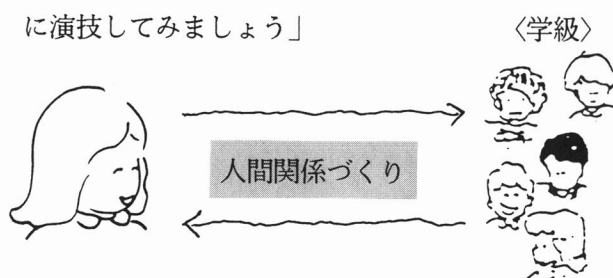
「遠慮せずに話してごらん」
「みんな、何かいらいらしてない」
「S子はどんな気持ちだろうね」

(3) 学級全体への指導援助

担任は、学級全体で互いを尊重し認め合う雰囲気づくりに努めた。以下は、望ましい人間関係づくりのロール・プレイングの例である。

《担任》

「三人一組になって、
お腹の痛い人、隣に座
っている人、そばで見
てる人になって、自由
に演技してみましょう」



子どもたちの感想から

「ちょっと恥ずかしい」
「冷たくされてショック」
「親切にされると嬉しい」
「優しい言葉をかけてあげ
たい気持ちになった」

人間同士のかわわりを体験する活動を重ねる中で、次第に、相手の気持ちに注意を払い、自分の態度や言葉を見つめ直す子どもが増えてきた。

(4) 家庭との連携

S子の両親の辛さや苦しみを受け止めつつ、学校の取り組みについて具体的に説明し、連携を図るため話し合った。

